# 鳳朗編『正風発句湯島三十六吟』

伊藤善隆

## はじめに

本稿は、肖像画入り句集『正風発句湯島三十六吟』（天保十二年奥、大本刊一冊、個人蔵）を図版ともに翻刻紹介するものである。

本書に入集し、跋文を記している「その女」（園女）が、鳳朗を「あが師自然堂の翁」と呼んでいるとおり、本書に入集する俳人たちは、鳳朗の主立った門人たちである。試みに本書に収録された三十六名を『新選俳諧年表』（書画珍本雑誌社、大正12年12月）で検索すると、竜風・聞二・茶静・風外・四山・鴬居・梧青・鳳棲・洞天・竹烟、の十名が、「鳳朗門」として記載されている。それ以外の俳人たちも、鳳朗の編になる『続砺浪山集続有磯海集』（天保十一年刊）や『水鶏笛集』（刊年不明）、また鳳朗の追善集である『冬椿集』（弘化三年刊）や『自然堂鳳朗居士三周忌碑前手向』（弘化三年刊）に句を寄せていることが確認できるので、本書を鳳朗一門の肖像画集であると判断することに問題はない。

さて、俳人の肖像画集に関しては、かつて「俳人肖像画集の展開　歌仙絵の変奏」（国文学研究資料館『江戸の歌仙絵』平成21年12月）と題した拙稿で、その史的展開を論じたことがある。

その際には、俳人の肖像画集を、①自己宣伝・自派宣揚の要素を持つ肖像画集、②〝イコン（聖像）〟としての肖像画集、③人名録としての実用性を備えた肖像画集、という三つの機能によって分類し、考察を加えた。具体的には、たとえば、①には貞門旧派に対して自分たちの存在を主張した西鶴の『哥仙大坂俳諧師』（延宝元年十月序刊）のような句集が、②には『芭蕉堂歌仙図』（明和七年刊）や『俳諧三十六歌僊』（寛政十一年刊）のように中興期以降の芭蕉顕彰の動きに伴って刊行された句集が、③には『万家人名録』（文化十年刊）以降に盛んになる俳人同士の交流を促す目的で刊行された句集が、それぞれ該当すると考えた。拙稿では、以上の分類によって肖像画集の史的展開を考察した上で、今後は具体的な個々の肖像画入り句集の紹介や検討が必要であると指摘した。

さて、そこで本書であるが、跋文には「湯島の聖廟へ一人一吟三十六章の額」を奉納したその「草稿」を刊行したものであると記されている。つまり、本書は、人目に触れる場所に掲げた鳳朗一門の句額を冊子として刊行したものであるということになる。

たしかに、本書の肖像は額縁風の枠の中に描かれているが、これは実際に掲げられた句額の額縁を描いたものであると理解することができる。この句額を掲げるという行為には、鳳朗一門の存在を広く世間にアピールしようとする意図があった、と見做すことができよう。とすれば、本書は、先に記した三つの機能のうち、①の自派を称揚するものに分類してよいだろう。『芭蕉葉ぶね』（文化十二年）以降、「蕉門正風」を標榜した鳳朗であってみれば、本書の角書に「正風発句」とあるのは、自派の俳風を世に示そうという意図を持っていたと考えてよいだろう。

さて、入集者の顔ぶれだが、巻頭の鳳朗に続いては、竜風（黒田斉（なり）

溥、のち長溥と改名、筑前福岡藩第十一代藩主）が、巻軸には喜縁（藤堂高猷、伊勢津藩第十一代藩主）が配されている点が注目される。他にも、春鶴（分部光寧か、近江大溝藩第十代藩主）、瀾長（山口弘封か、常陸牛久藩第九代藩生）、四山（松平直興、出雲母里藩第八代藩主）、といった大名俳人、また鴬居（奥平貞臣、伊予松山藩家老）や聞二（相馬中村藩家老）といった高級武家、あるいは英糸女（黒田斉溥室）、菊圃女（小松藩士で俳人の長谷部映門室）といった女流俳人、そして、逸淵（武州八幡山の旧家久米家出身の宗匠）や竹烟（坂上治右衛門、草津の温泉宿の主人）といった多彩な面々が入集する。

鳳朗といえば、天保十三年の芭蕉百五十回忌繰り上げ法要に際して、二条家に働きかけて芭蕉に「花本大明神」の称号を賜ったこと、併せて自身も「花本翁」の称号を許されたことがよく知られているが、本書収録の顔ぶれを見れば、大名から庶民にいたるまで、また地域も東北から四国、九州に至るまで、じつに多彩な門人がいたことが具体的に分かる。こうした基盤があってこその「花本翁」であったということがよく理解できよう。

また、本書の特徴として、画像だけでなく本名や通称が記載されていることも指摘できる。試みに本書に収録された三十六名を、『新選俳諧年表』（前掲）、および近世後期刊行の複数の人名録（『俳諧人名録』〈初編・天保七年、二編・弘化三年、三編・嘉永四年刊〉、『諸国俳人通名録』嘉永四年刊、『海内人名録』嘉永六年刊、『俳諧画像集』文久二年刊）など複数の人名録によって検索したところ、その半数については何らかの記載があることが確認できた（翻刻に添えた注記を参照されたい）。

しかし、このことを逆に考えれば、残りの半数の俳人たちは、本書に拠らなければ本名や通称が俄には判明しない俳人たちであるということになる。そもそも近世後期の俳人たちの大半は、いわゆる〝無名〟の俳人たちである。とすれば、本書で判明するような些細な情報の積み重ねこそ、近世後期から幕末期の俳諧研究にとっては必要不可欠なものである。

鳳朗は「天保の三大家」の一人として大変著名だが、その俳諧史上の存在感や知名度に比べて、研究は意外に少ない。その門人の概容を明らかにする本書は、鳳朗の俳諧活動の解明のためにも重要な資料であると言えよう。ここに、翻刻紹介する所以である。

〈書誌〉

書型……大本一冊（縦二六．八cm×横一八．五cm）。
袋綴じ。楮紙。
表紙……原表紙。砥粉色地に緑と紅で花柄模様を摺る。
題簽……左肩単辺。朱色料紙に「正風発句湯島三十六吟　全」と摺る。
版式……本文は、半葉ごとに額縁を描き、その中に一名ずつ肖像を描いて句を添える。額縁の内法は、縦一八．一cm×横一二．〇cm（鳳朗掲載箇所〈一オ〉を計測）。跋文は、無界無界、毎半葉行八行一五字内外。
字高……一七．九cm（跋文初行「竹の園生の～たとき」〈一九ウ〉を計測）。
刊記……ナシ。
丁数……全二〇丁。

〈凡例〉

翻刻にあたっては、句読点、濁点を適宜補い、改行も適宜改めた。
異体字等は概ね通行の字体に改め、一部原本の表記を残した。また、難読箇所は□で示した。
原本の各丁片面の終わりに当たるところに」をつけ、（　）内にその

丁数および表・裏（オ・ウ）を示した。

翻刻に続け、※印を付してそれぞれの人物に関する注記を私に加えた。なお、注記の作成にあたり、おもに「はじめに」で書名を示した近世後期刊行の人名録と鳳朗追善集『冬椿集』、また『国史大辞典』（吉川弘文館、昭和54年～平成9年）、『日本人名大辞典』（講談社、平成13年）、『日本人名大事典』（平凡社、昭和12年）、井上隆明編『江戸諸藩要覧』（東洋書院、昭和58年）を参照した。

参考のため、原本の図版を末尾に示した。なお、底本は一丁裏に切り取りによる大きな欠損があるため、当該箇所の図版は別本（個人蔵）で補った。また、表紙・裏表紙見返しは白紙であるため、省略した。

〈翻刻〉

正風発句湯島三十六吟　全　　（表紙題簽）

（白紙）　　（表紙見返し）

ふりかへるとき雲と成さくらかな　　鳳朗　　（オ）

※鳳朗（宝暦一二年～弘化二年）は肥後の出身。諸国遍歴の後、江戸に出て成美や道彦と交際、天保正風を標榜した。蒼虬・梅室と並んで「天保三大家」と称される。

美濃守源斎溥朝臣

郭公あふげば声も眼にかゝる　　竜風　　（ウ）

※『新選俳諧年表』に「◇龍風、福岡藩主、黒田氏、鳳朗門」と記載。黒田長溥（文化八年～明治二〇年）は、筑前福岡藩第十一代藩主。島津重豪の九男として生まれ、黒田斉清の養子となって長溥、のち斉溥と改めた。天保五年に襲封。蘭学吸収に積極的で、文政十一年には長崎でシーボルトと面会した。本書巻軸の喜縁（藤堂高猷）の子息長友を養嗣子とし、明治二年に家督を譲った。『冬椿集』に入集。

草野半右衛門

暮る日について遠のく浮巣哉　　聞二　　（オ二）

※『新選俳諧年表』に「◇聞二、草野氏、称半右衛門、相馬藩士、鳳朗門、嘉永年中」と記載。草野半右衛門正辰（?～弘化四年）は、相馬中村藩士。相馬益胤（ましたね）に登用されて家老となり、二宮尊徳の教えをとりいれて藩財政再建に取り組んだ。『冬椿集』に入集。

草場嘉八

暁も夜中も有て明安し　　台々　　（ウ二）

※経歴の詳細は不明。俳人番付「日本俳諧蕉風人名競」（天保十二年以前刊、東京大学総合図書館洒竹文庫蔵〈洒4241〉）の「東」五段目（全五段中）に「台々　、（江戸）」と記載。『冬椿集』に入集。

壹岐守源朝臣

みのむしもおにの子ならし女郎花　　貞宜　　（オ三）

※経歴の詳細は不明。『水鶏笛集』に入集。

多田祥助

待宵や月さし置て雲の出る　　太拳　　（ウ三）

※経歴の詳細は不明。「日本俳諧蕉風人名競」（前出）の「東」の二段目（全五段中）に「太拳　阿波」と記載がある。『冬椿集』に入集。

可布庵

初冬や人は大方早合点　　逸淵　　（オ四）

※逸淵（寛政二年～文久元年）は武蔵八幡山の旧家久米家の出身。春

秋庵系の宗匠として活躍した。『冬椿集』には門人の西馬と並んで入集する。

美濃守源斎溥室
見てゐれば月までとゞく蚊遣哉　英糸女　」（ウ四）
※黒田斉清（福岡藩第十一代藩主）娘の純姫（昌光院）か。

蜂須賀隼人
寝心の千畳敷や蚊屋の内　露泉　」（オ五）
※『新選俳諧年表』に「◇露泉、瀧氏、称九右衛門、狄事館と号す、徳島人」とある他、『諸国俳人通名録』にも記載。『冬椿集』に入集。

深澤八十郎
鹿笛やしひてふかせてさびしがる　真斎　」（ウ五）
※経歴の詳細は不明。『冬椿集』に入集。

井上清七
日のくれた所を宿や春の風　茶静　」（オ六）
※『新選俳諧年表』に「◇茶静、井上氏、称清七、竹樹軒、雪水軒と号す、鳳朗門、江戸人」、『俳諧人名録』初編に「茶静　雪水軒　東都西久保　井上清七　号竹樹軒覚睡」と記載。『冬椿集』に入集。

蓬窓
長月を其日〳〵の戸口哉　風外　」（ウ六）
※『新選俳諧年表』に「弘化三年　丙午　▼風外歿、十二月五日、享年六十九、品川舶船寺芭蕉堂の傍に碑あり、古川氏、蓬窓、初め史千と号す、鳳朗門、越後人」、『国々之友』（天保三年以降成、早稲田大学図書館雲英文庫蔵写本）に「史千事風外　江戸芝切通し　蓬窓」と記載。『冬椿集』に入集。

林茂
踏こめば気の強う成み雪哉　野堂　」（オ七）
※経歴の詳細は不明。『冬椿集』に入集。

分部左京亮源朝臣
大やうで用のしれぬや松の内　春鶴　」（ウ七）
※『新選俳諧年表』に「◇春鶴、近江大溝藩主、分部氏、風朗門」と記載。とすれば、分部光寧（みつやす）（文化六年～安政五年）か。光寧は、近江大溝藩第十代藩主。父光邦（みつくに）の急死により、文化七年に二歳で襲封。天保二年に二十三歳で隠居。『冬椿集』に入集。

望月弥右衛門
手をついてかこの嶌きゝにけり　徳丸　」（オ八）
※経歴の詳細は不明。『冬椿集』に入集。

松平左兵衛督舎弟
花にはのしつむでそゆる牡丹哉　一香　」（ウ八）
※経歴の詳細は不明。『冬椿集』に入集。

望月惣右衛門妻
寒菊やさきみだれても冬の花　秋翠女　」（オ九）
※経歴の詳細は不明。『冬椿集』に入集。

松平志摩守源朝臣

君が春千里外からみゆる也　　四山　　」（ウ九）

※『新選俳諧年表』に「安政元年　甲寅　▼四山歿、七月廿四日、享年六十餘、出雲母里藩主、松平氏、志摩守、東幻住庵、瓢海と号す、鳳朗門」とある他、『俳諧人名録』三編、『海内人名録』にも記載。松平直興（寛政一二年～嘉永七年）は、出雲母里藩第八代藩主。俳諧の他、書画、茶道、古器物の収集でも知られた。『冬椿集』に入集。

奥平弾正

暁やすゞめもいほの百千鳥　　鶯居　　」（オ一〇）

※奥平鶯居（文化六年～明治二十三年）は、名は貞臣、通称は弾正、別号は梅滴斎。伊予松山藩筆頭家老で、江戸詰のときに田川鳳朗の門人となった。明治十四年に俳誌『俳諧花の曙』を創刊、句集に『梅鶯集』がある。『新選俳諧年表』の他、『俳諧人名録』二編、『海内人名録』、『諸国俳人通名録』等にも記載され、俳人番付「俳諧正風　今人鏡」（文久二年刊、東京大学総合図書館洒竹文庫蔵〈洒4247〉）の中央四段目（全六段中）に「鶯居　イヨ」と載る。『冬椿集』に「イヨ」の肩書を付して入集。

竜珠院

明月のひらいたやうに出にけり　　梧青　　」（ウ一〇）

※『新選俳諧年表』に「◇梧青、江戸音羽護持院住職、名長盛、昼夜庵と号す、権大僧正、逸淵門」とある他、『海内人名録』にも記載。『冬椿集』に「ムサシ」の肩書を付して入集。

長谷部仲右衛門妻

色よきはとてもと、かずいはつ、じ　　菊圃女　　」（オ一一）

※『新選俳諧年表』に「◇菊圃女、長谷部氏、映門の妻、伊豫小松人」、『海内人名録』に「菊圃女　静佳園　伊予小松藩　長谷部映門妻」とある他、『諸国俳人通名録』、『国々之友』にも記載。俳人番付「蕉風俳諧　名家競」（安政二年刊、個人蔵）の「東之方」五段目（全六段中）に「菊圃　イヨ　同（前頭）」と載る。『冬椿集』には「イヨ」の肩書を付して、夫の映門と共に入集する。

稲田筑後

蓮咲やみてゐぬ花におとのする　　鳳棲　　」（ウ一一）

※『新選俳諧年表』に「◇鳳棲、稲田氏、称筑後、翠松亭と号す、徳島藩老、鳳朗門、安政年中」と記載。俳人番付「蕉風俳諧　名家競」（前出）の「西之方」三段目（全六段中）に「鳳棲　アハ　同（前頭）」と載る。稲田筑後家は徳島藩の筆頭家老で洲本城代を勤めた。とすれば、鳳棲は稲田芸植（享和二年～弘化四年）か。ただし、『冬椿集』には「アハ在エト」と肩書を付して入集。

岡本六左衛門

対松にかささしかくるしぐれかな　　駿台　　」（オ一三）

※経歴の詳細は不明。『冬椿集』に入集。

山口但馬守多々羅朝臣

散かゝりから暮てある紅葉かな　　瀾長　　」（ウ一三）

※瀾長は常陸牛久藩第六代藩主山口弘道（元文五年～天明三年）の俳号として知られるが、その後の藩主が代々襲名したという（『諸藩要覧』参照）。とすれば、この瀾長は第九代藩主の弘封か。なお、『新選俳諧年表』には「◇如息、常陸牛久藩生、山口氏、鳳朗門」、『俳諧人名録』二編下には「如息子　祇鳳楼　東都麻布笄橋」と記載。

如息は『冬椿集』にも入集。とすれば、瀾長は如息の別号か。

岡繁右衛門

生てゐて蝶舞出たりさ月雨　　樹村　　」（一三オ）

※経歴の詳細は不明。『冬椿集』「古人之部」に入集。とすれば、天保十二年以降、弘化三年までに没したと推測される。

葛岡肇

うしなうた蛍井どから立にけり　　橋水　　」（一三ウ）

※『俳諧人名録』二編に「橋水　士峰庵　東都青山雲母里藩　葛岡肇」と記載。『冬椿集』に入集。

斎藤安兵衛妻

明やすき夜のさいはひやけしの花　　園女　　」（一四オ）

※『新選俳諧年表』に「◇園女、斎藤氏、下総人、嘉永年中、閨秀俳家たり」、『海内人名録』に「園女　下総大穴村　斎藤安兵衛母」とある他、『俳諧人名録』三編、『海内人名録』、また『俳諧画像集』（文久二年刊）にが画像が、それぞれ記載される。『冬椿集』に「下フサ」と肩書を付して入集。

柏原良作

薄雲や一□隔て花に月　　洞天　　」（一四ウ）

※『新選俳諧年表』に「◇洞天、柏原氏、名親雄、称良作、松頂軒、盤古と号す、鳳朗門、福岡人、江戸住、天保年中」、『俳諧人名録』初編に「洞天　松頂軒　東都霞ヶ関筑前福岡藩　号盤古　柏原良作」と記載される他、「日本俳諧蕉風人名競」等、複数の俳人番付への記載が確認できる。『水鶏笛集』に入集。

出淵甫助

梅が香に近附風の無かりけり　　風盤　　」（一五オ）

※経歴の詳細は不明。『冬椿集』「古人之部」に入集。

一夏庵

風はなへ出て並びけり露の玉　　竹烟　　」（一五ウ）

※『新選俳諧年表』に「文久二年　壬戌　▼竹煙歿、七月十四日、坂上氏、称治右衛門、一夏庵と号す、鳳朗門、上州草津人」とある他、『俳諧人名録』三編、『海内人名録』にも記載される。俳人番付「俳諧正風　今人鏡」（前出）の右三段目（全五段中）に「竹烟　上ケ同（前頭）」と載る。『冬椿集』に入集。

吉田久四郎

ねて安堵したれは顔の寒さ哉　　永久　　」（一六オ）

※『諸国俳人通名録』に「〇武蔵　江戸　永久　麻布長坂」と記載。俳人番付「蕉風俳諧　名家競」（前出）の「西之方」五段目（全六段中）に「永久　ヱト　同（前頭）」と載る。『冬椿集』にも入集

田中庫之進

鴨啼や水霧かぶる天の川　　洒一　　」（一六ウ）

※経歴の詳細は不明。『冬椿集』に入集。

塚田市左衛門

そだつのにかゝつてゐずや春の草　　富梅　　」（一七オ）

※経歴の詳細は不明。『冬椿集』「古人之部」に入集。

諏訪部新兵衛

鳥にさへ似た羽色無桔梗哉　　千斎　　」（ウ一七）

※経歴の詳細は不明。『冬椿集』に入集。

田原養伯

花も葉もみな山吹の雫かな　　壺天　　」（オ一八）

※『俳諧人名録』二編に「壺天　汎湲堂　筑前福岡藩　田原養伯」と記載。

和泉守藤原高猷朝臣

つれ添てみつくゝりけりをしの妻　　喜縁　　」（ウ一八）

※藤堂高猷（文化一〇年～明治二八年）は伊勢津藩第十一代藩主。別号を観月楼、詢蕘斎と称し、明治期の俳壇でも活動した。

奉納俳諧発句三十六吟

撰　自然堂　鳳　朗
書　桑　門　契　月
画　谷　口　月　窓
奉行　松　林　螻　翁
執筆　岡　田　晨　支

天保十二辛丑二月　　」（オ一九）

※桑門契月は、原久胤（寛政四年～天保一五年）か。もと相模国大住郡下大槻村の名主で、のち江戸に出て国学、和歌を学んだ。

※谷口月窓（安永三年～慶応元年）は伊勢の出身で絵を月僊に学び、のち江戸で薩摩藩の絵師として活動した。諸書には、神田於玉ケ池、あるいは芝高輪の住と記載される。

※松林螻翁は、『海内人名録』に「螻翁　木契庵　東都池ノ端　松林氏」と記載される。

※岡田晨支は、『新選俳諧年表』に「天保十四年　癸卯　▼晨支歿、十一月十九日、享年三十九、岡田氏、称長蔵、戸岳と号す、鳳朗門、信濃人、江戸住」、『俳諧人名録』初編に「晨支　岡田　信州雪水」と記載される。

あが師自然堂の翁
竹の園生のかしこくもたとき
仰事を蒙らせ奉りまして湯島の
聖廟へ一人一吟三十六章の額を懸奉り
給ひしにつたなくもいやしき目をも撰加へ給りけるぞ、身のめいほく、難有しともかたじけなしとも、申さむ言葉のかぎりさへしらず。よて其草稿を」（ウ一九）乞得て筥宝となしもたりけるが、年経て帋魚のためにうしなはむ事をおそれ、をうなのこゝろさがなく桜木に物して、加吟の君たちへも送りたいまつり、世にも広めてすゑの世にも伝へ侍らましかば、いさゝか恩をむくひ奉らむはしにもとひとりごちて、かくはからひませしなり。女のあさまなるしはざと」（二〇）見捨おはして罪をゆるし給れかし

梅が香や六十一も古からず
かつしかのほとり稲花庵にすめる田守のうば　その女

東都　柳巴女書　」（ウ二〇）

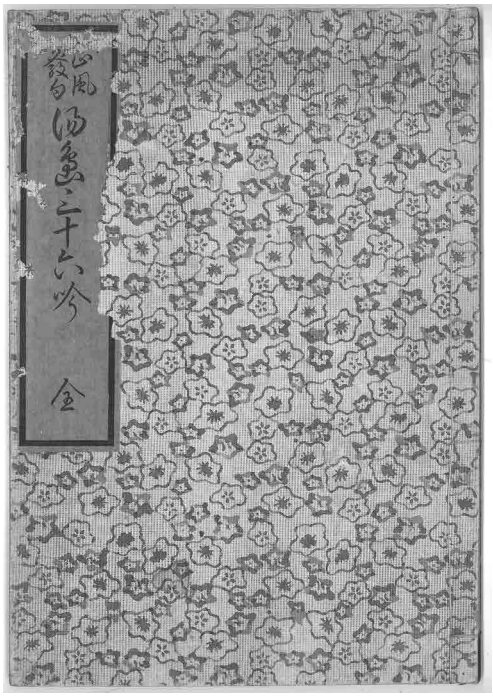
（白紙）　　（裏表紙見返し）

〈付記〉

本稿は、科学研究費補助金（基盤研究（C））「化政期俳諧再評価のための新研究」（研究課題番号18K00296代表・伊藤善隆）、ならびに平成30年度人文科学研究所個人研究「俳人肖像画集の研究」による研究成果の一部である。

〈図版〉

1. 表紙




2. 鳳朗（一オ）

3. 竜風（一ウ）

4. 聞二（二オ）

5. 台々（二ウ）

6. 貞宜（三オ）

7. 太拳（三ウ）

8. 逸淵（四オ）

9. 英糸女（四ウ）

10. 露泉（五オ）

11. 真斎（五ウ）

12. 茶静（六オ）

13. 風外（六ウ）

14. 野堂（七オ）

15. 春鶴（七ウ）

16. 徳丸（八オ）

17. 一香（八ウ）

18. 秋翠女（九オ）

19. 四山（九ウ）

20. 鶯居（一〇オ）

21. 梧青（一〇ウ）

22. 菊圃女（一一オ）

23. 鳳棲（一一ウ）

24. 駿台（一二オ）

25. 瀾長（一二ウ）

26. 樹村（一三オ）

27. 橋水（一三ウ）

28. 園女（一四オ）

29. 洞天（一四ウ）

30. 風盤（一五オ）

31. 竹烟（一五ウ）

32. 永久（一六オ）

33. 酒一（一六ウ）

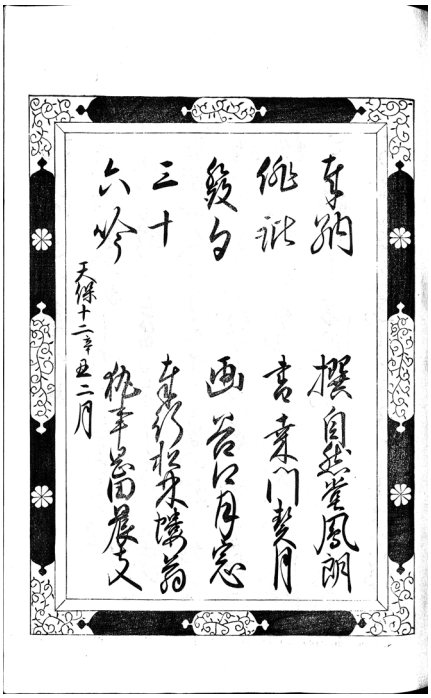
34. 富梅（一七オ）

35. 千斎（一七ウ）

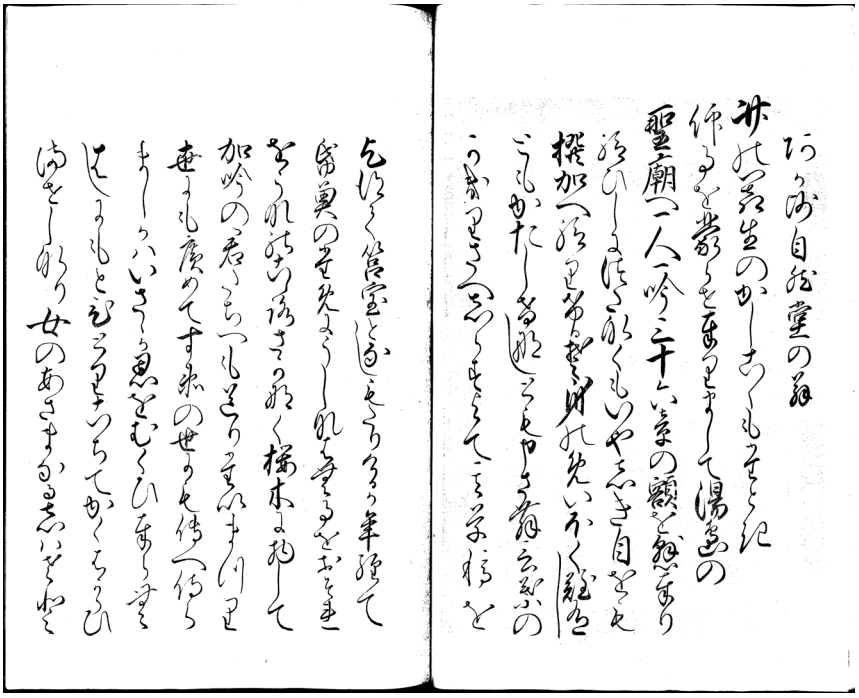
36. 壺天（一八オ）

37. 喜緑（一八ウ）

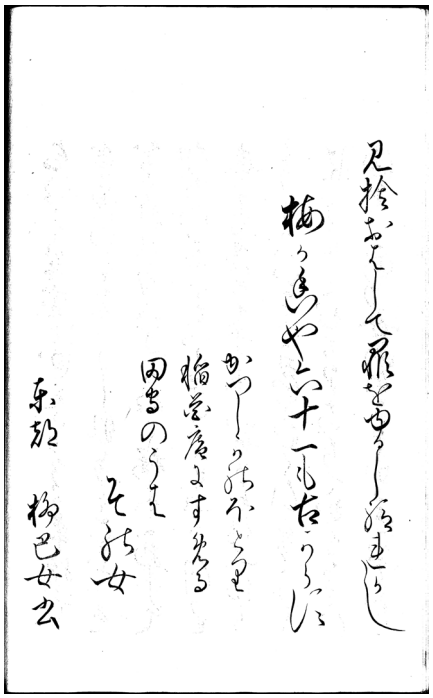
38. 奥書（一九オ）



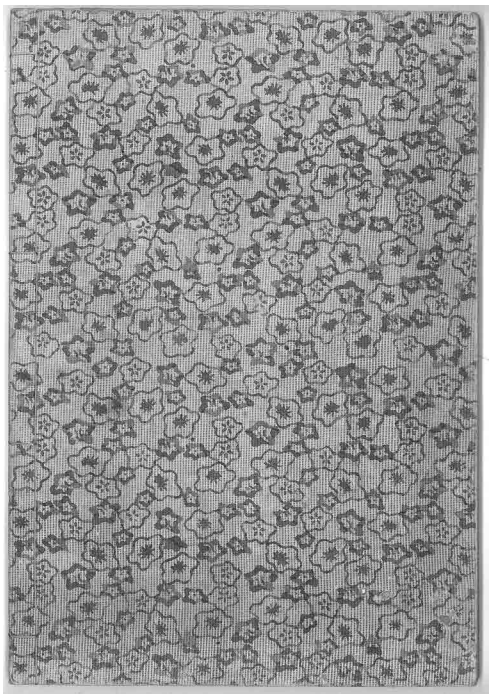
39. 跋文（一九ウ・二〇オ）



40. 跋文（二〇ウ）



41. 裏表紙



（参考）園女肖像　希水編『俳諧画像集』（文久二年刊）所載

※本書収録の肖像画より約二十年後のもの。